
怪社外伝・『人化かし』

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪社外伝・『人化かし』

【NZコード】

N6527E

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

久しぶりに人間界にやってきた妖仙狐は、腰の曲がった老人と、それにカツアゲする男に出会つた。新入社員『要戒十』に狐の化かしを見てみたい所望された妖仙狐は、男を不思議な空間に誘つていく。

(前書き)

本作品は、『怪社』『怪社員入社編』の特別編『妖仙狐の人化かし』を一部修正して公開したものです。現在公開されている『怪社』と一部設定の不一致がある可能性がありますが、ご了承ください。

冷たい雨が降っていた。町を歩く人の足音も、どこかそれを鬱陶しく思うように、あちこちでぶつきらぼうにコツコツと鳴っていた。気温がおかげでドッと下がる中、コートを深く着込む人間も、あちらこちら見受けられる。

ところが、そんな中において、一際目立つ者が一人いた。この雨の中、傘も差さずに帽子を耳深に被っているだけの、長身で奇妙な男だ。

怪しいのはそれだけではない。手袋をつけて、ズボンも足先までキツチリと身体を覆っている。それは普通と言えば普通かもしれないが、どこか自分を隠そうとした着こなしをしているようにも見える。

そんな男が信号機に差し掛かったところで、ふと横断歩道の真ん中に人が立っているのに気づいた。その人は、腰が直角に曲がっているのがよく目立つ、禿頭の男、すなわち、老人だった。

老人は、右へ左へとキヨロキヨロ首を動かしながら、何かを探していた。よく見ると、地べたに眼鏡が落ちているのが見えた。探しているのは恐らくそれだろう。

ようやく本人もそれを見つけるが、オドオドした手先は、なかなか眼鏡を掴むことが出来ないでいた。

気づけば、青だつた信号機も、ゆっくりと赤に変わらうとしていた。すると、先ほどの怪しいコートの男は、タツと駆け出した。

「おじいさん。大丈夫ですか？」

「ああ？ どなたですか？」

「どこにでもいるような、お人好しの男です」

「良い所に、眼鏡が落ちてしまつて、でも腰が悪くて取れないんです。拾ってくれませんか？」

「喜んで」

『コートの男は、地面に落ちた眼鏡を素早く拾い上げると、老人に自らかけてあげた。そしてすぐに老人を抱え上げ、横断歩道から立ち去った。

老人は、瞬きする間もなく移り変わった出来事に驚き、田をパチクリさせる。

「アンタ足がすいぶん速いですね。『すぱりんたー』とかいう奴ですか？」

「いえいえ。こうじうのは生まれつきなんですよ」

「違うんですか。勿体無いよそれは……。才能があるのにそれを発揮出来ないっていうのは、勿体無いよ」

何か思うところがあるのか、老人はしみじみとつぶやいた。コートの男はそれに対して、特に動じなかつた。

それから老人は、『コートの男に別れを告げると、また腰を直角に曲げて、ゆっくりゆっくり、一步一歩、歩き始めた。

そんな彼を見送っていると、後ろから男はポンポンと肩を叩かれた。気づいて振り返ると、肩を叩いたのは少年だということがわかつた。

少年は、至つて感情のない表情と、心の籠つてない瞳孔を持つ、どこか不思議な印象を相手に押し付けてくるような人物だった。

『コートの男と同じく、傘を差していくに、コートも着ていないのが、特に不気味だった。

「お待たせしました。目立ちますねその格好」

「何なら帽子を取つて歩きましょうか」

「さつきのお爺さんがショック死しますよ」

「見てたんなら私より前に助けてくださいよ。同じ『人間さん』でしう」

「ならどうして助けたんですか？ 見ていて不思議でしたよ。いきなり走り出して助けるんですから」

「理由なんてありませんよ。万物の本能です」

「一トの男は、少年にそつ一顎告げた。少年は少し首をかしげた。
「老いた犬を見て、愛おしさや、長生きさせたいという気持ちを人
間が抱くのと同じです。誰でも弱者を労わりたくなるものなんです」
「あなたはお爺さんより年を重ねてる方ではありませんか。それに、
無く子も黙る『大妖怪』さんですよ」

少年が、奇妙な名前を呼んだ。男の名前であるうか？ それにし
ては随分不自然な名前であった。

何かの芸名なのであれば、こういった名前もさほど不自然はない。
しかし、彼の雰囲気からは、そういう芸をする者の風格が見受け
られなかつた。

「今はこの通り、妖力の半分以上を封じられてしまつた、タダの狐
妖怪です」

「そういえばそんな話を錢鼬さんから聞きました」

「一トの男は、自分のことを狐妖怪と呼んだ。それに対して、少
年は何の動搖も見せなかつた。彼等にとって、それは『常識』的な
話だつたのだ。

奇怪な会話は、なおも続く。

「それでも妖力は結構使えるじゃないですか。どうしてわざわざそ
んな薄意味の悪い格好で町を歩いて、不審者になる必要があるんで
すか？」

「さつき言つたように、私は妖力を封じられた時に、いくつかの術
も封じられたんですよ。だから狐や狸が一般的に使って当然である
はずの変化術も、今や使えなくなつてしまつてね」

「なるほど」

「だからこりつう雨の日でもないと、人間世界に遊びに出ることも
出来ないんですよ、戒十さん」

「不便ですね」

「別にそうは思いませんね。あ、人間の作る美味しいものがあんま
り食べられなくなつたのは残念かもしれないけれどね」

「妖怪も、結構美食家なんですね。錢鼬さんもそんなこと言つてましたよ」

「彼の場合は、半分が生身の鼬だから、余計にそうなんですよ」

そんな人知では幻か、作り話か、戯言にしか聞こえない会話をしながら歩いていく二人だったが、そんな二人の歩く先に、人が二人ほど見えてきた。

一人は、腰を直角に曲げた禿頭の男、すなわちさつきの老人だつた。なにやら首を必死にあげて、相手と会話している。

話している相手の方は、彼とは違つて胸を張り、堂々とした男であつた。年齢はわからないが、かなり若いということだけはわかる。全身から漲つている、野生の獣のような威圧感は、老人を軽々しく圧倒していた。彼が少し突き飛ばしてみれば、老人はあっけなく歩道に吹き飛ばされるであろう。

腰が曲がっているうえに引けていてる老人は、何か困つたように首を振つたり、手を横に振つて何かを拒否していた。

それを見た奇怪な二人は、怪訝な顔をするどころか、興味を持つた野次馬なような顔を見合させて、前の二人に近づいていく。すると、徐々に会話が聞こえてきた。

「散歩しにきただけだから、あんまりお金はないんですよ」

「俺もサイフ落としちゃつて、家に帰れないんだよね。この間もガキ数人が俺一人をリンチにしやがつてさ、それでお金盗られちゃつて……あー、思い出しだけでムカツクわ～」

「……あの」

「ねえお爺さん。俺つて可哀想でしょ？」

「え？ はあ、そう思いますけど」

「もう大晦日も近いし、お年玉つて時期じやない。だから少しでいいから恵まれない俺にお年玉頂戴よ」

「そんなこといきなり言われましても……」

「あー、わかつたわかつた。年金が最近いろいろ問題になつてゐるのもわかるよ。俺こう見えてもニュース見る方だから」

自分を指差しながら、若い男は一カツと笑う。対して老人の表情は、どんどん曇っていく。

「でも俺の場合は元が無いのよ。仕事もこの間理不尽な店長のおかげでクビになっちゃって、お給料を引き落とすつにもサイフがないからさ。通帳も使わないと思つて遠い実家にあるんだよ」

「そ、それは大変ですねえ……」

じれつたくなってきたのか、主張はどんどん無茶苦茶な方向に向かつていった。

「本当俺恵まれてないんですよ。だからお爺さん。未来ある若者のために、一つ」寄付を!」

老人に負けじと腰を直角に曲げて、若い男は図々しく手を差し出してきた。

早く出さないと打ち殺すぞとでも手に書いてあつたのか、老人の顔はどんどん青ざめていった。

一通りを見ていた戒十といつ名の少年と、妖仙狐といつ自称狐妖怪は、ニカツと笑った。

「面白い光景ですね」

「そうですね。今は追い剥ぎの仕方も随分変わつたものです。それともあれは物乞いですか?」

「い、いえ。さて、どうします?」

「どうします? でしたら、戒十さんが決めてください、どんなのがお望みですか?」

「希望を言つていいくですか?」

「私のような弱小妖怪に出来るようなことであれば、なんでもどひつぞ」

「やうですねえ。せつかくの機会ですから……」

戒十はそう言われて、少し俯いて考え込んだ。妖仙狐は、それを楽しそうに眺めた。

結構考えていたように見えたが、さほど時間のかからない「ひつぞ」、元けり出に対する答えを出した。

「狐らしい化かしを、見てみたいですね」

「ほう……」

妖仙狐の気が変わった。今まで感じられた低姿勢な感覚は失せ、どこか堂々としたものになる。

そして、田深に被つた帽子の中から、何か細長く光るもののが見えたかと思うと、懷から何かを取り出し始めた。

「コードの懷から出てきたものは、ヒラヒラした紙切れだった。さらには、戒十の足元にたまたまあった、どこにでも落ちているものを拾わせる。

「さて。せつかく人々の人間世界ですから、私にとつてもあなたにとつても面白い物を、見せてあげましょう」

妖仙狐は、クククと笑いながらそんなことを言った。

「もし……そこの方」

「あん？」

若い男が、突然苛立つた声をあげた。さっきまでの敬語的な口調は、一瞬で吹き飛んでいた。

「怪しいものではありません。ただ、失礼ながらこれまでのお話、立ち聞きさせていただきました」

「へえ、それじゃあ邪魔しに来たってわけか」

眉間にシワを寄せながら、男が手をポキポキと鳴らしあげた。それを見た妖仙狐は、慌てて手をヒラヒラと振りながら、否定した。

「滅相も無い。お金にお困りとのお話をしたので」

そう言つと妖仙狐は、ポケットから何か分厚い紙の束を取り出した。

最初は何なのかよくわからなかつたが、よく見るとそれはとんでもないものだつた。

「ひ、ひひひひ百万？！」

「私実は、そんなに後が長くないんですよ。そこで恵まれない方に

こうしてお金を渡しているんですね

「これ、本当にくれるのかよ？」

「そうでなければ、こんな話は致しませんって。はい、どうぞ」

妖仙狐は、何の躊躇いも無く、その百万円の札束を若い男に渡した。

渡された男は、しばらく放心していたが、すぐに自分に起こった出来事を理解して、歓喜し始めた。

まるで下手をすると、追い詰められて怒りのあまり狂ってしまった男のように見える。

「ありがとよ！　すげえ！　これが百万円かよ！　やつたあ――

つ！　あははははは！」

男は歓喜の声をあげ続けながら、老人のことなどすっかり別れて、そのままどこかへといつてしまつた。

行つてしまつた後、老人はどこか申し訳なさそうに妖仙狐の元に顔を向けた。

「あんな大金渡してしまつて、アンタ本当に死にかけだつたのかい？」

「いいえ。私にとつてあんなものは屁でもないですよ」

そう言いながら、妖仙狐は帽子をゆつくりととつた。とつた帽子の中からは、髪の毛にしては異常な量をした金色の毛が出てきた。さらに、耳らしき部分は天へと突き出し、口はやけに横に伸びて長く、鼻もその伸びた先にあつた。

彼の顔は、この世に存在する生き物で例えるのであれば、正しく

『狐』の顔をしていた。

それを見た老人は当然のようにたまげたが、突然傘を投げ捨て、雨で濡れていいるのにも関わらず、コンクリートの地面に跪いて、土下座をした。

「き、狐の神様！　神様がお助けくださつたんですね！　はあ～

… ありがたやありがたや……」

そして、本当に神様を崇めるように、手をすり合わせて拝み始め

た。

雨に濡れながらも、なお拌み続ける老人を見下ろしながら、妖仙狐は、後ろで二カ二カと眺めていた戒十に話しかける。

「では、見に行きますよ」

「楽しみですね」

二人はそう言って、不敵に笑いあつた。

しばらくして老人が顔を上げた頃、もう田の前に狐の顔をした男と、奇妙な少年はいなくなつていた。

目をしばらく擦り続けた老人は、その後通りかかった警察官によつて交番に保護されていった。

「百万かあ、百万だよ～、はははは～！」

飛び跳ねてクルツクルツとフィギュアスケートのように回るほど歓喜していた若い男は、百万円を両手に持つたままどこかへと向かつていた。

とりあえず、先んじて彼は酒をたくさん買い込んだかった。彼はとてもない酒好きだったのだ。

「あれ？ 酒屋への道はこっちだつたと思つんだが」

ポケットに百万円の束を突っ込みながら、彼は今行こうとしていた所に自分が着いていないことに気づいた。

金に気をとられすぎて道を間違えたのだろうと思つて、彼は引き返そうとした。

ところが、背後に今まで通つてきたらしい道はなかつた。浮かれすぎて本当に知らない道に入つてしまつたのか。

自分が本当にヤバイ所に来てしまつたと気づいた彼は、少し冷静になつて、今まで来た道を探そと、辺りを徘徊し始めた。

しかし、いくら道を変えてみても、一向に今まで来た道が見えてこない。それどころか、引き返そとするとまた見覚えのない道になつていた。

「俺、もう酒飲んでいたつけ」

彼はそんなことを本気で考え始めた。しかし、やっぱりそんな記憶は無い。意識もハツキリとしている。

だとすると、自分は一体どこに迷い込んでしまったのだろうか？それからもあらゆるところを彷徨つてみたが、全く知ってる道には出られなかつた。

流石に恐ろしくなつた彼は、どこか高いところに昇つて道を確かめようと考え方付いた。目に付いた高いビルへと上り、その窓からここがどこかを見てみようと考えたのだ。

急いで階段を上がりしていくと、ふいに途中で足が止まつた。階段の途中に古めかしい扉があつたかと思うと、そこに店があつたのだ。そこは、どこか渋い雰囲気を漂わせたバーだつた。人を惹きつける魅力を持つたその店に、男はなんとなく足が進んだ。

しかし今は真昼間だ。店など本当に開いているのだろうか？ そんなことを不安がつたが、駄目元で入つてみようと彼はそのまま扉を開けた。

「いらっしゃいませ……」

店はやつていた。彼は驚いたが、同時に大層喜んだ。

嬉々として椅子に座つた彼は、すっかり自分がこのビルに入り込んだ目的を、一瞬忘れていた。

ふいに、店主の姿を彼は見てみた。しかし、照明が暗いせいで、顔がどんな形をしているかまではわからなかつた。

「どうしました。こんな昼間に」

突然店主が話しかけてきた。ビックリして身体を一瞬震わせた彼だつたが、極めて冷静沈着を氣取つてそれに言葉を返す。

「道に迷つちやつてさあ。でもこんな所にバーなんてあつたんだね。知らない所だけど」

「おかげでお客があんまり来ないんですよ……こんなところに作つて失敗しました」

気さくに話しかける店主に対して、彼は過剰とも言える笑い声で話しに対する対応を返した。

何せ百万円持つている男だ。さほど大したことがないことですから、今の彼にとつては大声で笑えるようなことだった。

「さて、何に致しましょう」

「そうだねえ。オススメはなんがある?」

「赤ワインなんていかがでしょう。うちのは美味しいって評判ですよ」

「ワインか、大人の風格があつていいねえ。それに決めた!」

「ありがとうございます」

店主は、ワインを入れるためのグラスを手際よく用意した。その手際の良さに、男は自分がリッチになつた気分になつて、また気分を良くした。

そして店主は、次にワインの瓶を取るかと、突然自分の身体をグラグラと揺らし始めた。男はそれを不自然に思つたが、舞い上がつていた彼にはそれもまた面白かった。

少しの沈黙の後、店主はワインを静かに注いだ。その様子を男は一コ二コしながらじつくり眺めようと、グラスと店主に目を向けた。

「本当に自慢なんですよ、このワイン」

「あつ……あつ……」

男の笑顔が一瞬にして消えた。そして、口をパクパクさせながら、店主を指差した。

店主は、別段何か起こつたようでもなくそれに答えた。

「どうかしましたか?」

「だ、だだだだつてアンタ……く、くくくくく」

「何がおかしいんですか」

少し不機嫌そうながらも、氣さくに答える店主だったが、男の調子は戻らなかつた。

「アンタ……アンタ」

「はい」

「く、首がねえじやんかよお!」

彼の言つとおり、店主に首はなかつた。

そして、その店主はその欠けている首の真ん中にポツカリ空いた漆黒色の穴から、静かにワインを注いでいた。

首から注がれたワインは、正に鮮やかな真紅色をして、とても綺麗だった……。

「わああああああ！」

男は、椅子を倒して、扉を蹴破つて外に出た。店は彼の暴走によつて、一瞬で汚されてしまった。

そんな失礼な男を、店主はカウンターから必死に呼び止めるが、彼はさつさといつてしまつた。

「お客様、お勘定がまだですよー」

また自分一人だけになつた店の中で、店主は寂しげにつぶやいた。

「こんな薄気味悪いところなんて、さつさと抜け出でやるー。ちくしょう、なんだって言うんだよ！」

男はまたビルを駆け上がつていつた。今度は余裕が全く無かつた。ゼエゼエ言いながら屋上へと駆け上がる男だつたが、一向に屋上の階は見えてこなかつた。

とうとう疲れてバテてしまつた男は、途中の踊り場で息を一度整えることにした。

そして、少し自分でも落ち着いたかと思つと、ふいに窓があることに気づいた。

冷静さを欠いて窓のことを見逃していたとは自分も情けないと思いつながら、彼は外の風景を見た。

「…………

男はまた絶句した。この状況を見れば、どんな人間でこうなるだろう。

外の風景を見てみると、そこは自分が今まで生きてきた世界ではなかつた。

空は赤く、大地は荒れ果て、川らしきところにはマグマが流れている。そんな光景を、彼は昔映画で見たことがあつた。

「ここはすなわち……」

「地獄……なのか？」

窓に貼りついて、彼はしばらくその光景をずっと見ていた。あまりにも唐突すぎて、言葉が出なかつた。

だが、ふいに彼は下のほうから熱気がくるのを感じた。それも尋常ではない暑さだった。

あまりにも暑いので、窓から田を逸らして、下を見てみると、またそこには信じられないものが自分に迫つていた。

彼を暑さで苦しめていたのは、まるで火山から噴火したかのよくな、マグマだつた。

瞬時にここにいては危ないと判断した彼は、今度は死ぬ気で走り始めた。さつきとは比べ物にならない速さだった。

もはや驚きの言葉すらでなかつた。あり得ないこととの連續で、言葉の出しようも無かつたのである。

まるでその光景は、さながら溶岩との戦いのようであった。正に彼は、地獄の鬼のようなものによって、こゝつして追われている。そして、もう走れないかもしれないといつといつで、彼は屋上の扉を見つけた。そして、まるで肉にでも飛びついたよつて、ドアノブを捻つて扉を開け放つた。

意外にも簡単に開いたので彼は肩透かしを食らつたよつになつたが、すぐに逃げ場はないかと辺りを見渡した。

まず、下を見下ろしてみるとさつきまで自分がいたはずの地上には、このビル以外の建物はなくなつていた。

というより、あがつてきた階数が階数だけに、下に何があるかよく見えなかつたのである。

それを確認したかと思うと、後ろから溶岩が噴出してきた。男は腰を抜かしたような体勢になりながら、何も無いビルの端っこへと後ずさつしていく。

「なんだよ……これ」

「自分でおつしゃつていたじゃないですか」

ヒツ！ という情けない声をあげてから、男は後ろを振り返った。そこには、富司の格好をした狐が、浮き上がりこっちを見ていた。その隣には、人間もいた。ただし、この世のものとは思えないほど、この地獄においても冷たい感情を感じるほど、冷血な雰囲気を漂わせた。

すなわち、妖仙狐と、戒十少年だった。

「地獄、ですよ」

「お前か！ こんなところに連れてきたのは、お前なんだな！」

「何を言つてるんですか。あなたはご自分でこの地獄に入ったんですよ」

「何だと？ 誰が好き好んでこんなところに来るかよ！」

「そうでしょうか？」

妖仙狐は、彼に背中を向けて、手を後ろに組んで、静かに語り始めた。

「地獄に行きたくない人は、例え偽善であつても、偽りの心であつても……人間にとつて一般的な善の行動を取ります。そして閻魔大王様も、それを認めて少しばかり地獄での刑期を軽減してくれます」「なんだと？」

「あなたは、自分の行動を省みてください。閻魔様に頼んで資料を頂きましたが、さつきの追い剥ぎ以外にも随分と悪いことしてるみたいですね～」

「黙れ！」

「無錢飲食、万引き、スリ、詐欺……わあ、殺人未遂もあるんですね」

「うるさい、俺をここから帰せ！」

「そんなこと言われましても、あなたは持つてるじゃないですか。それを」

と、妖仙狐は彼のポケットを指差した。百万円の入っているポケットだ。彼はポケットから百万円の束を取り出した。やはり何の変哲もない札束だ。れ

「ほひ、その束の真ん中、引っ張り出して『うらんなさ』」
言われるがままに、彼は束を崩して扇形にして、真ん中から紙を一枚取り出してみた。

『地獄行き希望券』

「あつ……なんだこれは……」

「あなたがそれを貰つてくださつたおかげで、私は地獄に行かなくて済みましたよ。本当に感謝します」

「ふ、ふざけるな！ 熱つ！」

気づけば、彼の足元には、もつ溶岩が差し迫つていた。

急いで逃げようとする彼だったが、後ろには大地は無かつた。思わず足を滑らせた彼は、ビルの淵につかまつた。

しかし、溶岩は容赦なく彼の手を焼こうと、じわりじわりと迫ってきた。

「さて、こよいよ地獄に『落ちる』時が来たようです。それでは、お達者で」

そう言つと、彼が瞬きした隙に、一人は瞬時に消えてしまつた。
居なくなつた途端、急に態度を変えて助けてくれ！ と言んだが、もつ遅かつた。

彼の手を、溶岩が焼いたその時……彼の身体は、一気に下へと落

下して言つた。

落ちた男の断末魔は、まるで地獄全土に響き渡るようじ、けたたましく、あちらこちらに反響した……。

「お兄さん、お兄さん」

「……あ

「気がついた。何やつてんだよアンタ

「えつ？」

「自殺したかつたのか、酔つ払つてたのか知らないけどね。だからつて何でトラックの荷台になんで乗つかつてくるんだよ」

虚ろな目で、彼は辺りを見渡した。曇つた空と冷たい雨が自分を

包んでいたことに、数秒経つてから気づいた。

ここは紛れも無く、自分が今まで生きてきた世界だった。ただ、自分の住んでいる土地では無かつたが。

もしかして、今までのことは全て、夢だったのだろうか？

「ほら、さつさと降りてくれ。あーあ、商品が田茶田茶だよ。弁償だなこれは」

「あ、ああ……」

彼は自分の手を見た。溶岩で焼けたはずの手は、焼けてはいなかつた。ただ少し、荷台を触ったせいか、埃にまみれて薄汚れていた。そして彼は弁償しろと言われて、ふいに百万円のこと思い出した。ポケットをすぐに彼は探つてみた。

カサツという音がした。一瞬怯みながらも、彼はそれをすぐに取り出した。

ポケットから出てきたものは、ただの木の葉と、一枚の何か漢字が一文字書かれた紙切れだった。

「夢じゃない……」
「これは……」

彼はようやく気づいた、あの狐に化かされたのだと……。手に持つていた木の葉と紙が、バラバラッと落ちる。

「うわああああああ！　わああああああ！」

「おいおこちよつと、弁償しろって弁償だよー！」

叫びながら当てもなく走り去つていく彼を、トライクの運転手はどうこまでも追いかけ続けた。

男の手より落ちて、木の葉の真ん中に自然と落下した紙は、役目を終えたかのように、静かに燃えた。

そして、木の葉以外には、紙の燃えカスすらも、残らなかつた。

「全く、妖仙狐さんもお遊びが過ぎますなあ

「すいませんね、マスター」

「店はちょっと壊されるし、おまけに話に聞いてると、私は溶岩の海に巻き込まれてしまつたそうじやないですか」

「まあまあそう怒らずに」

「怒りはしません。常連様ですからね」

そう言つと、首の無いマスターは、首からまたワインを注いだ。ワインを手に取る妖仙狐の横で、戒十はしれっとした顔をしてそれを眺めた。

「戒十さんも、せつかくだから何か飲む?」

「未成年です」

「ああ、そうでしたね」

「水はないんですか?」

「ありますよ。フツーの水がね」

といつて、戒十には普通の水が手渡された。それを彼は、一気にゴクッと飲み干した。

「でも、面白かったですよ」

「化かしとは、こういうものです。私が山篭りしていた頃は、数え切れないほどの人間の驚く顔を見てきました。あれは堪らないですよ」

「本当に、良いものを見せていただきました」

「そうですか、満足頂けましたか?」

妖仙狐は、彼の感想にニコッとして笑い、手を差し出した。それを見た戒十は、無表情のまま首をかしげる。

「なんですか? これは」

「御代、いただきます」

「魂一つ?」

「勿論

「つままりは……?」

「うことで

「ツケで」

「仕方ありませんね」

諦めた妖仙狐は、手を元に戻すと、またワインをそつと飲み始め

た。

「そういえば、あの人はどう行ったんでしょうね」

「確かに青森って書いてありましたねえ。トラックに」

「お金も無いのに、帰つてくるまでどれだけかかるんでしょうか」

戒十は、そういうて手の平で革製の値が張りそうなサイフを弄んだ。

「私は人間界にそれほど詳しくないので、詳しくはわからないですね」

「帰つてから、暇つぶしに計算でもしてみましょうか？ 歩いてここまで帰つてくるまでの時間を」

そんなことを語り合いながら、妖怪達の夜は更けていく。

戒十は、それからもずっと水だけを飲み続けていた。

「やっぱり、普通の水が一番ですね」

(後書き)

妖仙狐というキャラクターが個人的には好きで、主軸に何か書けないかと、当時学校で一時間半ほど一心に書いた作品です。今見ると本当にゲゲゲの鬼太郎における「幽霊電車」と「地獄流し」の融合だなあ、としか思えないのが、いかに当時鬼太郎に感化されていたかがわかります。今でも鬼太郎にはかなり影響を受けていますが。あんまり怖くないと思うのですが、一応ジャンルはホラーにしておきます。ファンタジーのほうがやっぱり合っているかもしれません

が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6527e/>

怪社外伝・『人化かし』

2010年10月8日15時30分発行